

鹿児島での空襲体験談

私は鹿児島県南さつま市の出身で、知覧特攻隊の近くに住んでいました。特攻隊の飛行機が狙われるため、私たちの地域は何度も空襲に遭っていました。

防空壕は、崖に穴を掘る横穴式で、各家庭がそれぞれの防空壕を持っていました。警戒警報が鳴ると学校へは行きませんでした。空襲警報の前に鳴る警戒警報の時点で、すでに艦載機が飛んでいました。上空に艦載機がいるときに田んぼへ行くと丸見えになって狙われてしまい、漁師も海に出ると船が目立って狙われてしまいます。船が狙われている様子を、丘の上から何度も見ました。空襲は目立つものから狙われ、まずは工場や港、田舎なら駅や線路が銃撃されていました。

当時私は小学3年生でした。ランドセルは赤く塗られた段ボールで作られたものだったので、2年も持ちませんでした。生活のために学校の校庭にイモを植えたり、小学2年生の頃には山に連れられて松脂を集めたり、海岸で砂鉄を集めたこともあります。人手が足りないので、新聞配達も小学生の仕事でした。もちろんお金はもらえませんでした。

小学1年生まではまともに学校に通えていましたが、2年生頃から教室が兵隊の宿のようになっていました。男性の学校の先生は戦地へ招集されていたので、男の先生は校長先生と副校長先生くらいでした。代わりに、代用教員という女学校を卒業したてくらいの人たちが勉強を教えてくれていました。九九を間違えただけで長いものさしで叩かれ、すぐに怒られました。先生と警察が正しいのだと教えられていました。

学校に持っていく弁当も今のように豪華ではなく、日の丸弁当の経験もあります。運動靴や傘など身に着けるものは、クラスごとに何点か配布されますが、それはうんと遠くから通っている児童から順に与えられます。とにかく物が無い時代だったので、消しゴムが無いときは、誰かが「靴底で消える」と言うと、みんなが真似しました。

授業といっても、兵隊への慰問文、戦争の絵、軍歌を歌うなど、軍事教育一色でした。

「欲しがりません。勝つまでは。」の言葉のとおり、みんな我慢していたと思います。

田舎の小学校は1学年3クラス程度でしたが、市内が焼けて田舎の方へ通う生徒が増えると学校の備品が足りなくなり、体育館を仕切っただけの教室で、一つのイスに半分ずつ2人で座っていました。

6月に沖縄が制圧されてしまい、次は鹿児島県の吹上浜に上陸するというので、たくさん兵隊が集まっていました。兵隊にとっても薬も食べ物もない生活で、みんな痩せ細っていました。田舎だから大きな病院はなく、集会所が兵隊の病院のようになっていました。薬がないから病死してしまう人が結構いて、人間の死んだ匂いを嗅ぎました。夏だからすごい匂いがしたのを覚えています。

戦時中は、とにかく食糧がありませんでした。お砂糖が配給制になって少ししかもらえないので、大事に取っておきました。農家がたくさん収穫したとしても産業組合（現在の農協）に納める決まりでした。良い作物は産業組合へ納めるので、形の悪いものばかりが残っていました。食事はずっとイモや麦の入ったご飯で、家畜のごはんのようでした。白いご飯はお正月や運動会のときだけ食べられました。今考えると、よく耐えたと思います。

米も配給制となり、自由には買えず、米穀手帳がないと米を売ってもらえませんでした。食糧不足による肺結核が流行しました。薬が無いので、かかってしまえば死ぬしかなく、現在のガンより恐れられていました。

当時20歳の長男に召集令状が届きました。3日も経たないうちに一つの場所に集められ、銃の使い方などの訓練をしていました。戦地に向かう1週間前は毎日面会することができ、母と姉と3人でお米のおにぎりを作って最後のお別れとなりました。

手紙が来ても、どこにいるかは書けません。検閲されるので、本当のことはわかりませんでした。長男の戦死の知らせは、骨箱を受け取ったことで知りました。中身は空で

木の板切れだけが入っていて、石ころの人もいたらしいです。近所の10軒ほどのうち4名が戦死してしまい、古民家に箱を並べて合同でお葬式をしました。今になって、どう死んだのか、どんな思いで亡くなったのか、考えてしまいます。母は終戦後に「お国のためと言っていたけど、何にもならなかったね」と言っていました。子どもの私にはよくわからなかったけれど、大人は苦勞していたと思います。

当時小学6年生だった夫も鹿児島市に住んでいて、家の庭に爆弾が落ちましたが、偶然にも不発弾だったので生き延びることができました。鹿児島市の9割が空襲の被害に遭っています。市内に住んでいる人は、被害に遭わないと罹災者証明が出ませんでした。夫は不発弾のおかげで罹災者証明を手に入れ、おばあちゃんの家疎開することができました。

戦時中は国際条約で、赤十字の乗り物は狙ってはいけないと決まっていた。ただ、緑十字の食料を運ぶ船は、兵隊に届く前に狙われて沈没していたので、戦地の半分は飢え死にしていたと話を聞きました。当時は情報が少なく、今のようにテレビはありません。ラジオもどの家庭にでもあるわけではなく、終戦間際になると新聞は片面のみで、いつも「日本は勝っている」という内容でした。

戦後の鹿児島は焼け野原が広がっていて、東日本大震災の津波のように全体が見渡せるようになっていました。8月15日の時点ですでに疎開してきた人が多く、掘っ立て小屋を建てて、なんとか暮らしていました。戦地から帰ってくる兵隊は汽車の中がぎゅうぎゅう詰めで、屋根の上にも乗ってきていました。みんな不潔だから、シラミが衣服について人から人へ移っていたらしいです。

戦争はもうしないでほしいです。災害は仕方がないけれど、戦争は人と人が起こしたものです。止めようと思えば、どこかで止められたのだと思います。今豊かに暮らしてられるのは、80年間も戦争が無いからです。日本では戦国時代から過去ずっと戦争が続いていたのに、80年も無いのが不思議なくらいだと思います。戦争はとても残酷

で、体験した人にしかわからないこともあります。体験した人がいなくなった世界でも、尊い平和が続くように語り継ぎ、学んでいかなければならないと思います。